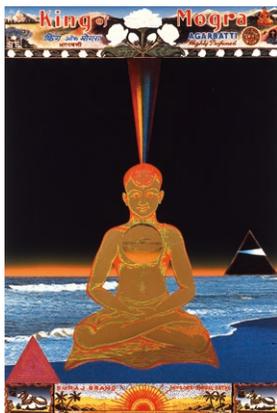


音楽
と
美術

この1枚



横尾忠則《火其地「聖シャンバラ」》
1974年3月 シルクスクリーン、オフセット、
98.0×68.0cm 世田谷美術館蔵



細野晴臣と横尾忠則 /
コチンの月
キングレコード 1978年 (CD)
様々なSEとともに横尾の話し
声も収録。実はYMOのメン
バーに誘われていて、タクシー
でまで誘えたが、記者発表の
会見の場に現れることなく、4
人目は幻となった。

横尾忠則
《火其地「聖シャンバラ」》

異才二人のインド旅行が生んだYMOへの助走

画家宣言により横尾忠則(1936年-)がグラフィックデザイナーからペインターへと転換したのは1980年7月。ニューヨーク近代美術館で見た「ピカソ展」に衝撃を受けたのがきっかけだった。

版画集《聖シャンバラ》は、10枚一組で75部の限定出版。1974年3月に制作された。1968年に初めて試みた版画がバリ青年ビエンナーレ展に出品されてグランプリの榮譽に輝くが、70年に交通事故で2年間休業することになり、三島由紀夫の死と入院体験が、精神世界、霊的体験、UFO、超常現象といった異世界への扉を開いた。

「シャンバラ」とは、インド仏教の經典『時輪タントラ』で説かれる理想の仏教国のこと。神秘思想ではアジアのどこかにある地下都市をアガルタと呼び、その首都の名でもある。

音楽の世界では、コルトレーンやビー

トルズが60年代後半にインドへと向かい、神秘体験に新たな道を求めた。横尾は74年にインドへ旅行し、レコード会社からサウンド・カラージュの依頼を受けていた。そこにトロピカル音楽を手がける細野晴臣が訪ねて来て意気投合、インドを再訪し、その印象をまとめたアルバムが「コチンの月」だった。

横尾はアドバイザー的な役割で、実質的には細野が制作。シンセサイザーを主体とした実験的な異色作となる。インド滞在中にドイツのテクノ・ポップを細野に教えたのが横尾だった。坂本龍一とエンジニアの松武秀樹も参加し、このアルバムがYMO結成の端緒となった。

世田谷美術館 学芸員 矢野 進

担当した主な展覧会に、「瀧口修造と武満徹」、「植草甚一/マイ・フェイヴァリット・シングス」、「東宝スタジオ展 映画=創造の現場」、「花森安治の仕事」など。

音楽
と
本

この1冊



『狐のだんぶくろ』
(1983年、潮出版社/装幀：野中ユリ)
※現在、入手可能な文庫本は『私の少年時代』(2012年、河出書房新社)。本書作品の多くを収録する。

澁澤龍彦
『狐のだんぶくろ』
黄金時代の記憶

『狐のだんぶくろ』は、1982年1月から翌年8月まで「のぞき眼鏡」と題して雑誌「潮」に連載した20篇に、「戦前戦後、私の銀座」「私の日本橋」の2篇を加えた一冊。当時50歳を過ぎた澁澤はみずからの少年期を「黄金時代」と呼び、昭和20年(1945)以前のエピソードを中心に川越、滝野川中里(現・北区)で育った日々などを回想する。

自他ともに認める優れた記憶力を持つ少年・澁澤は、耳にする童謡や軍歌、広告塔のイルミネーションの点滅の順序まで自然に覚えてしまう子どもだった。単行本化にあたり本の題名にもなった「狐のだんぶくろ」は、お手伝いさんが歌っていた正体不明の歌の一節で、連載時に「もし御存じの方があつたら、ぜひお知らせを願いたいものである」と結んだ一篇。これは中山晋平作曲『童謡小曲 第2集』(1922年、山野楽器店)収録の童

謡「狐のだんぶくろ」のことで、「あとがき」に読者の反響が大きく楽譜を送る人もいたとの後日談を記す。

ここで、澁澤が好んだシャンソンを紹介しておこう。「読売新聞」(1975年8月17日)の「一枚のレコード」欄掲載の「リス・ゴーティの歌う『パリ祭』」である。17歳の澁澤が終戦後に旧制高校の寮で聞いたシャンソン「パリ祭(A Paris dans chaque faubourg)」は、昭和3年生まれに於いて戦前の雰囲気を感じるものだった。少年期の記憶がヨーロッパ文化への親しみを抱かせ、やがてフランス文学に向かわせたことが伺える。

世田谷文学館 学芸員 宮崎京子

10/7(土)から企画展「澁澤龍彦 ドラコニアの地平」を開催します。今年没後30年を迎えるフランス文学者・澁澤龍彦の幅広い創作世界をご覧ください。詳細はお問合わせを。Tel.03-5374-9111
<http://www.setabun.or.jp>